山梨県立 Yamanashi Prefectural Archaeological Museum

考古博物館だより

HP ACCESS

No. 100

https://www.pref.yamanashi.jp/kouko-hak/

@yamanashi_kouko　@yamanashi.kouko1103

The 42nd 特別展

縄文文化の謎を考える

―パプアニューギニアの民族誌―

2025 9.27 SAT ― 12.7 SUN

OPEN 9:00-17:00

Topics

- 開催報告―Report―
- 山梨県立考古博物館だより１００号によせて

PAPUA×JOMON

［画像］右：タラカヌーの舳先飾り ミルンベイ州 早稲田大学蔵 / 左：山梨県指定文化財 顔面装飾付土器 海道前Ｃ遺跡 山梨県立考古博物館蔵　［背景画像提供］South Pacific Tourism Organisation(©SPTO)

第42回 特別展

日本・パプアニューギニア国交樹立５０周年

PAPUA

I　II

遺物画像：I 儀礼用仮面土器・II 精霊の仮面（イーストセピック州）早稲田大学蔵

縄文文化の謎を考える ―パプアニューギニアの民族誌―

パプアニューギニアは、オーストラリアの北、インドネシアの東に位置する赤道直下の地域にあり、一万近くの島々で成り立つオセアニア州に属する大小６００以上の島からなる広大な島国です。熱帯雨林や火山といった、厳しくも多彩な自然環境が織りなす独自の文化で知られ、中でも「プリミティブ・アート（部族芸術）」と総称されるPNG（パプアニューギニア）アートには、８００を超える部族の歴史と信仰が刻まれており、アフリカン・アートや日本の縄文文化を彷彿とさせるような躍動感あふれる美しいデザインが今なお息づいています。本展では、早稲田大学考古学研究室が長きに渡り調査・研究してきたパプアニューギニアの民俗資料とともに、多種多様な日本の縄文資料を比較紹介することで、遠く離れた両地域における儀礼や精神文化の共通性を探りながら、縄文文化を新たな視点から深掘りします。

写真提供：PNG ジャパン　　アサロマッドマン

MAP of PAPUA NEW GUINEA

JOMON

Ⅲ

会場
山梨県立
考古博物館

Ⅳ

2025.9.27 SAT — 12.7 SUN

開館時間　9時～17時［入館は16時30分まで］
休 館 日　毎週月曜日［10月13日・11月3日・24日は開館］

Ⅴ

序 パプアニューギニアと民族誌
――なぜ今パプアニューギニアなのか？

パプアニューギニアの地理・歴史といった基礎知識とともに、なぜ今回のテーマに至ったかにも通じる、早稲田大学考古学研究室による長きに渡ってのパプアニューギニア研究の足跡と蒐集資料の由来について紹介します。

Ⅰ オセアニア地域と縄文文化の類似性

日本とパプアニューギニアの間には直線距離でおよそ５０００ｋｍもの隔たりがあります。遠く海の彼方に位置するオセアニア地域の文化と、日本の縄文文化との間に、どのような文化的類似性があるのか、国や地域の違いを超えた双方の特色を深掘ります。

Ⅵ

Ⅱ 素焼きの土器と伝統文化

パプアニューギニアにおける素焼き土器の製造工程や技術の伝達方法と縄文土器の共通性を紹介するとともに、交易品としての土器のあり方に着目します。

Ⅶ

Ⅷ

Ⅲ 縄文文様・モチーフの共通性

縄文時代の文様には人や動物・神を思わせる多彩な表現がみられますが、パプアニューギニアの造形にもまた、祖霊や精霊、トーテム（部族を象徴する動植物）といった重要なモチーフがほどこされています。本章では、単なる装飾を超えた社会的・文化的な意味合いがこめられた文様表現を見比べながら、双方に通底する精神世界の謎にせまります。

Ⅸ

Ⅳ 縄文精神世界との共通性

神話や伝説上の精霊像、部族を象徴するトーテム、忘我へいざなう原始的な儀礼の数々――パプアニューギニアに息づく独特な文化は、現代においても太古の世界を彷彿とさせる原初の営みにもっとも近い存在です。今なお自然界のただ中で生きる人々の様子とその文化を通して、はるか一万五千年前に花開いた縄文文化をひもとくヒントを探ります。

日・パプアニューギニア外交関係樹立 50 周年記念

WASEDA University
早稲田大学

Ⅲ［複製］土偶 蒔内遺跡※原品は重要文化財（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター蔵、Ⅳ深鉢形土器 甲ッ原遺跡 山梨県立考古博物館蔵、Ⅴ精霊の仮面・Ⅵ舞踏儀礼用被り面・Ⅷ精霊像（イーストセピック州）、Ⅶ炊事用土器（モロベ州）・Ⅸ豚の置物 早稲田大学蔵

■ 観覧料

一般・大学生	600（480）円
小・中・高校生 県内在住の 65 歳以上の方	無料

※（　）内は 20 名以上の団体料金
※障がい者手帳をお持ちの方と付き添いの方 1 名無料

■ 主催
山梨県立考古博物館

■ 共催
早稲田大学

■ 後援
パプアニューギニア大使館 / 国際機関太平洋諸島センター（PIC）/ 朝日新聞甲府総局 / エフエム甲府 / エフエム富士 / 産経新聞甲府支局 / テレビ朝日甲府支局 / テレビ山梨 / 日本ネットワークサービス / 毎日新聞甲府支局 / 山梨新報社 / 山梨日日新聞社・山梨放送 / 読売新聞甲府支局 / 曽根丘陵公園指定管理者 富士観光開発・富士グリーンテックグループ

■ 協力
外務省 / 太平洋観光局（SPTO）/（有）PNG ジャパン / 山梨県立考古博物館協力会 / 縄文王国山梨実行委員会 / 甲信縄文文化発信・活性化協議会

参加無料
要予約

現地・オンライン同時開催
記念講演会

現地会場：風土記の丘研修センター

10.26 日　10:00-15:00［中休みあり］

基調講演
高橋 龍三郎 館長（早稲田大学名誉教授）
「パプアニューギニアの民族誌の調査」

講演
中門 亮太 氏（早稲田大学文学部准教授）
「オセアニアの民族造形（仮）」

平原 信崇 氏（千葉県教育庁教育振興部文化財課）
「縄文土器とパプアニューギニアの土器作り（仮）」

根岸 洋 氏（東京大学文学部准教授）
「パプアニューギニアの考古学（仮）」

申込方法
9 月 27 日（土）よりホームページまたは電話【☎055-266-3881】にて申し込みを受け付けます。また、オンライン配信へのご予約はホームページのみでの対応となります。

Report. 1

Spring Exhibition
春季企画展

Title

帆立貝古墳のミステリー
―三珠大塚古墳と甲府盆地の５世紀―

4 月 19 日 (土) ～ 6 月 15 日 (日) の期間に、春季企画展「帆立貝古墳のミステリー ―三珠大塚古墳と甲府盆地の５世紀―」を開催しました。本展の副題にもある「三珠大塚古墳」は、山梨県西八代郡市川三郷町に所在する帆立貝古墳の代表例で、多くの出土品が山梨県指定文化財に指定されています。その中には短甲・挂甲 (けいこう) とよばれる甲冑や、直刀、鉄鏃、胡籙 (ころく) など軍事的なもの、鈴釧 (すずくしろ)・鈴鏡といった祭祀的なものなど、築造当時の背景がうかがえる優品が目立つものの、詳細については最初の発掘以来３０年余り、長らく謎に包まれてきました。今回の展示では、そうした不明部分を今一度洗いなおす形で、最新の研究成果に基づき大塚古墳とその周辺の古墳、および同時代の甲府盆地の古墳変遷を辿りました。そもそも「帆立貝古墳」とは何か？という根本的なところから、一度製造が途絶えた埴輪はいかにして復活したのか？といった出土品の歴史的背景にもスポットを当て、大型古墳の時代の終焉とともに潰えながらリバイバルを果たしたもの、リニューアルをしたものなど、時代経過とともに移り変わった副葬品のトレンドにも注目する機会となりました。

六鈴鏡　三珠大塚古墳
市川三郷町教育委員会蔵

鈴釧 (鈴付銅器) 三珠大塚古墳
市川三郷町教育委員会蔵

一度伝統の途絶えた
埴輪の復活劇!?
その製法にも変化が…？

乗馬風習の広がりに伴い
甲ちゅうのトレンドにも
変化が…？

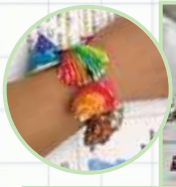
Mitama Ootsuka

Report. 2

Title

自由研究プロジェクト

カラフル♪



アイメッセ山梨

海の日である７月 21 日 (月祝)、毎年恒例の合同プレゼン・自由研究プロジェクトに参加してきました。ミュージアム甲斐ネットワークを構成する山梨県内の文化施設が一堂に集うこのイベントでは、自由研究に悩む子どもたちに向けてアイディアのヒントになるようなワークショップを提供しています。毎回、子どもたちの知的好奇心を刺激するような学びと遊びが一体となった体験を目指し、各館が工夫を凝らしてそれぞれの持ち味を発揮しています。当館では今回古代のアクセサリーに注目し、最も古い素材のひとつである貝殻を使ったカラフルなブレスレット作りを行いました。また、当館主催の自由研究コンクール「わたしたちの研究室」における優秀作品の掲示や、黒曜石などの原石ふれあいコーナーも設置。配布した自由研究のコツやヒントをまとめたリーフレットはとりわけ人気で、より実践的なアイディアの需要を実感しました。

Report.3

Summer Exhibition
夏季企画展

Title

釣手土器の世界

大阪の顔？
ニャクニャ〇似と
一部で話題

竹宇１遺跡
北杜市教育委員会蔵

姥神遺跡
北杜市教育委員会蔵

安道寺遺跡
当館蔵

約80点の遺物が語る摩訶不思議な釣手土器ワールド

山梨県内出土の釣手土器が大集合！

ほぼ

ウラ？　オモテ？

宮の前遺跡
西桂町教育委員会蔵

オモテとウラでまったく違う表情を見せるのも釣手土器の魅力！

会期中に来ていた学芸員実習生たちにもお気に入りの釣手土器を選んでもらいました

小さいの（※）と並んでいる様子がナイス！

※土器のカプセルトイ

伝・肥道遺跡　当館蔵

インパクトのあるデザインがナイス！

塩瀬下原遺跡
当館蔵

7月12日（土）～8月31日（日）の期間に、夏季企画展「釣手土器の世界」を開催しました。中部高地（山梨・長野をまたぐ八ヶ岳を中心とした地域）生まれとされる釣手土器は、その奇怪な造形はもちろん、用途においても特殊な性格を持ちます。通常、土器といえば煮炊きをする鍋として知られ、鉢形の深さのあるものを思い浮かべますが、釣手土器はその名の通り、把手のついた籠のような造りのものや、中が空洞になった仮面のようなデザインなど、見る角度によって表情の変わる不思議な造形が特徴です。

縄文時代にはこの内側の空間に火種を入れて、ランプのように使ったのでは？と言われているのも、この土器の特筆すべきポイントです。ランプといっても、現代のわたしたちが使っているような気軽な照明とは少し様相が異なります。それらは儀式やマツリのような特別な場面で用いられたものと考えられており、その過剰なほどの装飾や表裏でデザインの違う二面性、神とも人とも断定できない奇妙な造形など、一つの土器に意味深な要素がたっぷりと詰めこまれており、謎が尽きません。展示では、釣手土器の元祖ともいえる土器をはじめ、その造形に影響を与えた土偶や顔面装飾などにも言及しつつ、いかにしてこの「特殊器形」といわれる土器が生まれたのか、変遷を辿る内容となりました。

釣手土器を実際にランプとして使ったら…？を体験できる小部屋を設置！あやしい…

Report.4

Title

祝 学術文化交流協定締結

台湾新北市立十三行博物館 × 山梨県立考古博物館

この度、山梨県立考古博物館は台湾の新北市立十三行博物館と学術文化交流協定を締結しました。当館では、昨年度から台湾でのイベントに職員を直接派遣し、積極的に現地の方とのコミュニケーションをはかりながら交流を深めてまいりました。そしていよいよ交流２年目となる今年、令和７年５月23日（金）に、台湾にて調印式を執り行い、当館の高橋館長と十三行博物館羅館長が協定書に署名しました。

▲当館の高橋館長（左）と十三行博物館の羅館長（右）

▲台湾からは人面付きの土器を、当館からは縄文土器のレプリカを贈呈

この協定締結は宮崎県立西都原考古博物館・兵庫県立考古博物館に続いて三館目となり、両館における調査研究や展示に関して、より理解を深め、交流を重ねるためのものです。調印式ではそれぞれ土器のレプリカを持ち寄り、互いの国の個性が光るそれらを交換することで記念品としました。先方からいただいた土器は当館のエントランスホールにて展示しておりますので、ぜひその顔立ちや表現技法を当館の土器と見比べながら、じっくりと観察していただければと思います。

Report.5

Title

遺跡発掘秘話

考古学講座

※第４回のみ２人の講師による対談方式を予定していましたが、小林氏体調不良のため予定を変更し、他の回と同様１人での講演となりました。

今年度は各回テーマの遺跡を実際に掘った、あるいは関わりが深い４人の講師が登壇！当時の発掘現場に立ち会った者しか知らない生の声を挟みつつ、山梨を代表する４つの遺跡の基本情報から裏話までをたっぷりと語っていただきました。

6/14（土）

身延山大学講師 保坂 康夫 氏

北杜市丘の公園遺跡群発掘秘話

―貴重な約２万年前の旧石器時代のムラと発掘方法の革命―

6/28（土）

山梨県考古学協会会長 新津 健 氏

北杜市金生遺跡発掘秘話

―八ヶ岳を臨む縄文晩期の祭祀跡―

7/12（土）

山梨県考古学協会名誉会長 末木 健 氏

甲斐市金の尾遺跡発掘秘話

―中央自動車道建設で見つかった弥生と縄文の集落と墓域―

7/26（土）

当館学芸課 野代 幸和 課長

甲州市安道寺遺跡発掘秘話

―あの水煙文土器はこうして見つかった―

※小林 広和 氏は欠席

久しぶりにリモート配信のない会場のみでの開催でしたが、普段はあまり見ない十代の参加者も多く、終了後も講師と熱心に意見を交わす様子が見られるなど、関心の高さがうかがえました。

年２回発行 広報誌

山梨県立考古博物館だより No.100

当館の広報誌「山梨県立考古博物館だより」は今号で１００号を迎えます。１９８３年の第１号発行以来、４２年間に渡って途絶えることなく発行を続けた結果、こうして節目の号を迎えることができました。発行時期の試行錯誤を重ねながら、現在では年に２回、３月と８月の刊行を続けており、当館の情報をわかりやすく、気軽に取得できるメディアのひとつとして利用していただいております。館内ほか、県内外の文化施設等にて配布しておりますので、お見かけの際にはぜひお手に取ってご覧ください。また、当館ホームページではバックナンバーの電子データも公開しておりますので、そちらも合わせてご活用ください。

バックナンバーはコチラからどうぞ

山梨県立考古博物館だより一〇〇号によせて

館長 高橋 龍三郎

『山梨県立考古博物館だより』は、本館が開設された翌年、昭和58年にスタートしました。創刊号はモノクローム写真を掲載し全６頁でした。発行元の博物館の所在地が山梨県東八代郡中道町下曽根というのが何とも歴史を感じさせます。爾来（じらい）、年２回の発行ペースを守り、40年余の星霜を経て、今年一〇〇号に達したわけです。B版から今のA版に変更されたのが第37号、平成８年で天皇陛下（現上皇）の行幸啓があった時です。平成18年の第62号でオールカラー化されたと伺っております。

A4サイズになった37号

本誌は、博物館の事業、企画展や特別展などの催し物の紹介と案内、イベント情報を中心に、その時々の動向を盛り込んでおります。併設される山梨県埋蔵文化財センターの発掘調査情報を発信し、研究成果をトピックスにまとめて解り易く解説した号もありました。本誌は県民への情報発信と普及活動を目的とするもので、そのためにできるだけ難しい専門用語を避けて、むしろ一般の感覚に近い表現を用いています。

「〇〇の謎」とか「〇〇のミステリー」とか、一般の方々が知らず知らずのうちに引き込まれてしまうような表現を用いますので、それに誘われて来館された方も多かったに違いありません。

また本館の大きな事業である「わたしたちの研究室」コーナーも設けられています。「わたしたちの研究室」事業は、県内の小中学生を対象に、郷土山梨県の歴史や考古学を学んでもらい、その研究成果を発表してもらう場として親しまれてきました。全国的にも数少ない事例だと思います。

本年３月、安道寺遺跡（甲州市）出土の大型深鉢形土器が国の重要文化財とするよう答申されました。本館では殿林遺跡深鉢形土器、一の沢遺跡出土品、酒呑場遺跡出土品の指定に続く４番目の指定です。縄文時代の遺物では全国有数の質量を誇る本館ならではの慶事です。多くの来館者の皆様に縄文土器工芸の「華」を堪能していただければと思います。

安道寺遺跡出土品　撮影：小川 忠博

リモート 館長講座

学際的研究と発見―考古学研究の未来―

今年度の館長講座では、特別展「PAPUA×JOMON」の開催にちなみ、パプアニューギニアとオセアニアの民族誌をヒントに、日本の縄文文化についてあらたな見地から深掘りします。

第②回 9.7㊐ オセアニアの民族誌と考古学

第③回 12.7㊐ 科学で読み解く縄文社会

第④回 2026 3.22㊐ 縄文土器を作った人々の心象世界

各回開催日の１か月前よりホームページにて予約を受け付けます（定員になり次第終了）。

※リモート配信へのお申込みは電話・来館での受付はできません。詳細の確認とご予約はコチラからどうぞ。➡

ホームページから 要予約 参加費無料

※第１回は終了しました。

研究成果大募集！

第23回

わたしたちの研究室

応募者全員に参加賞あります★

オリジナルクリアホルダ

参加賞例

Q.『わたしたちの研究室』ってなぁに？

A. 小・中学生のみなさんが、夏休みや学校の総合的な学習の時間などにまとめた歴史や考古学に関する学習・研究成果を募集する自由研究コンクールです。

募集種別

個人研究部門（小学校の部・中学校の部）
団体研究部門

※最優秀賞（山梨県知事賞）ほか、優秀な作品は部門ごとに各種表彰します。

賞に応じて賞状・副賞の授与あり★

募集期間

令和７年
9月2日(火)～11月9日(日)

形式

作品の形式は自由です！
【模造紙・レポート・動画・立体作品など】

専用ページはコチラ

問い合わせ 質問・相談

山梨県立考古博物館・学芸課　TEL055-266-3881

※作品は別途配布中のチラシの応募用紙とともに、郵送もしくは直接考古博物館へお持ちください。
※応募用紙は考古博物館のホームページからもダウンロードできます。また、作品の持参が難しい場合はご相談ください。

考古博物館・風土記の丘研修センター利用のご案内

山梨県立考古博物館

開館時間 9時～17時【入館は16時30分まで】
TEL 055-266-3881 FAX 055-266-3882

観覧料 ＜常設展＞	
一般・大学生	220(170)円
高校生以下	無料
65歳以上の方	無料（要証明書）〈特別展の場合は県内在住の方のみ無料〉

※（　）内は20名以上の団体料金
障がい者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名無料
山梨県民の日（11月20日）無料

休館日

毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
祝・祭日の翌日（土・日・祝は除く）
年末年始（12月29日～1月1日）
風土記の丘研修センターは1月3日まで休館

令和7年度臨時休館

9月20日（土）～26日（金）
12月9日（火）～14日（日）
令和8年1月13日（火）～18日（日）
※展示会準備・撤収・館内整備のため

考古博物館定期観覧券【1年間当館の常設展と特別展を何回でも観覧可】

一般・大学生 1,360円

ミュージアム甲斐in券【4館共通定期観覧券（年間パスポート券）】

※当館・県立博物館・県立美術館・県立文学館の4館で1年間有効。
一般 5,240円　大学生 2,620円

交通アクセス

路線バスの利用◆JR甲府駅より塩山行（中道橋経由）「県立考古博物館」下車
自家用車の利用◆中央自動車道甲府南ICより1分（インター正面）

風土記の丘研修センター

開館時間 8時30分～17時
TEL 055-266-5286 FAX 055-266-5287

学校（団体）の利用について

教育課程（小・中学校、高等学校、特別支援学校）で入館される場合は事前に見学の申し込みをお願いいたします。
見学時間を十分にとり、ゆっくりと見学できるようにしてください。
できるだけ下見をし、担当職員と打ち合わせをしてください。
学校見学の申し込みと問い合わせ先：風土記の丘研修センター

発行日　令和7年8月22日
発　行　山梨県立考古博物館
住　所　〒400－1508　山梨県甲府市下曽根町923
電　話　055－266－3881
印　刷　株式会社　峡南堂印刷所

今秋はいよいよ第42回特別展「PAPUA×JOMON 縄文文化の謎を考える―パプアニューギニアの民族誌―」が始まります。本展では、太古の世界観が今なお息づくパプアニューギニアの民族誌をひもとくことで、縄文文化を新たな視点から考察します。台湾との学術文化交流協定締結をはじめ、国際色豊かになりつつある当館の活動にご注目ください！（あ）。